

茶室明々庵

明々庵は非常に美しい茶室で、松平家の7代大名松平治郷（1751-1818）の設計で1779年に建てられました。治郷は茶人として有名で禅も修めており、不昧という号でも知られていました。この茶室、庭、何世代にもわたって受け継がれてきた道具、およびここで伝統的に提供される和菓子は全て、彼が創始した「不昧流」という茶道の流派による、絶妙で従来の枠組みにとらわれない感性を具現化したものです。

魅力

明々庵の歴史は複雑です。それは美しさと魅力があり、また解体と移築が容易であったことによります。明々庵は元々松江城近くの有澤家本邸の敷地内に建てられていましたが、数世代後に解体され、東京・原宿の松原新之助伯爵（1853-1916）の屋敷に移されました。その後、再び東京・四谷の松平直之伯爵（1861-1932）の所有地に移され、1928年に松江郊外の高台に移されました。第二次世界大戦後、次第に荒廃していきましたが、地元の支援により、不昧の没後150年を経た1966年、現在の松江の赤山に復元されました。

親密さを主題とした茶室設計

明々庵の内装設計の中心にあるのは、二畳の茶室（二畳台目）という極めて狭く親密さを感じる大きさの空間です。外から入るには「にじり口」と呼ばれる小さな通路から、手と膝をついて這うようにして入ります。近くには刀を吊るす棚があり、高位の大名でも武器を持たずに入らなければならないことになっていました。半透明の障子で覆われた小窓は高さを変えて設置されており、部屋に優しい光が差し込むように調整することができるようになっています。床の間には、書や絵画などの掛け軸や生け花、装飾品などが飾られています。縁には皮を一部剥がした松の小柱があり、質素な雰囲気醸し出しています。不昧の茶室の工夫の一つに、中柱と呼ばれる柱をなくしたことが挙げられます。中柱は狭い空間の設計上のアクセントとして用いられ、主人の席と来客の席を分けるものでした。この柱がないことで、空間はより簡素なものになり、主人と来客は物理的・心理的距離が縮まります。

茶室に隣接した、水屋と呼ばれる小さな準備室には、簡素な棚と道具の収納空間があります。茶室と水屋は低い襖で隔てられているので、主人は水屋に準備しておいた道具を簡単に取り出すことができます。茶室の反対側にはより大きな屋根付きの貴人口と待合室があり、ここには普通に入ることができます。これは位の高い来客が使用するために設けられたものです。独自の水屋があるこの部屋も大規模な茶会に使用することができます。一番奥にある小さな第三の入り口は、手伝い人やその他の関係者が茶会

の準備のために使うものです。

質素な外観

明々庵は、切妻の高い茅葺き屋根が特徴で、これは「不味好み」と呼ばれます。設計と建築方法は農家の屋敷とよく似ており、貧しさと質素さが感じられます。屋根の勾配が急なのは、冬の豪雪時に雪が積もらないようにするための工夫です。深い切妻の窪みには、「明々庵」と書かれた色あせた木版があります。茶室は砂利を敷き詰めた小さな中庭の中にあり、大小さまざまな形や色の飛び石がリズムよく配置されています。周囲の木々は、外から隔絶され守られているような雰囲気醸し出します。小さな屋根付きの休憩所は中庭への入口となっており、来客が茶室に呼ばれるまで待つための腰掛けと装飾付きのトイレもあります。このトイレは清潔さともてなしの象徴であり、使用されるためのものではありません。

広々とした外庭は出雲式の庭園となっており、簾の跡が残る小石の地面に、大きな踏み石が小道を作っています。目隠しのように木や注意深く選定された低木が並び、これらが合わさって山の景観を想起させます。この空間は中庭から切り離され、茶室も屋根の角以外は見えません。近隣の赤山茶道会館の正面にも、小石を敷いた大きな庭園があり、こちらからは松江城の見事な眺めを楽しめます。